

## 医療ルネサンス

No.5796

## シリーズ 薬

## 危険な処方

3/4

2000年5月、突然の激しいめまいに襲われ、東京の耳鼻科医院を受診した。医師は薬で体質を変える」と、ベンゾジアゼピン系薬剤を3種類処方した。これらは精神科で多く処方されるが、筋肉の緊張を和らげる作用や鎮静作用などを期待し、一般診療科でも安易に処方されやすい。

\*Benzo Case Japan  
http://www.benzo-case-japan.com



インターネットサイト  
の作成に力を入れた  
ウエイン・ダグラス  
さん(長野県の自宅)

先月下旬、抗不安薬と睡眠薬の多くを占めるベンゾジアゼピン系薬剤の有害性や減薬法を紹介するインターネットサイト「Benzo Case Japan」が開設された。ニュージーランド人のウエイン・ダグラスさん(47)が、英国人医師らの協力で日本語版と英語版を完成させた。

決まった量でも長く飲むと不安感などが強まる依存症に陥る恐れがある。耐性ができて薬の効果がなくなり、断薬した時と同じような離脱症状が表れるためだ。だが医師は「少量では依存性はなく副作用もほとんどない」と説明した。

その後、症状は悪化。恐怖や不安に突然襲われるパニック発作など、以前はなかつた症状も表れた。同年11月に断薬を試みたが、パニック発作が頻繁に起き、耐えられず薬を再開した。

だが「日本の状況を変えたい」との思いは強まった。東日本大震災の時は福島県内の国際交流施設で仕事をしていた被災したが、日本にとどまった。避難先で英語講師のアルバイトをしながら、12年にはベンゾジアゼピン系薬剤の減薬手引「アシュトンマニュアル」の日本語版を翻訳者のひとりとして完成させた。「おかげで断薬できた」との感謝の声が次々と届く。

# 安易な継続で依存症状

くらし 家庭

「科学的根拠のない処方」で大きな利益を被った。ダグラスさんは07年、民事

裁判所も頼れない日本では、正しい情報で社会を変えるしかない。欧米の著名な医師たちも日本を問題視しており、力を借りて患者のネット調査などを行っている」と意欲を見せている。